



No. **45** 2018年7月号 **ユース**

ポポフ(POPOF)はポレポレ基金(Pole Pole Foundation)の略称で、1992 年にコンゴ民主共和国で設立された NGO(非政府・非営利団体)です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕するヒガシローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくり民芸品を販売して、地元でエコツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、ヒガシローランドゴリラを題材にした絵はがき、カレンダー、エコバッグを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で保護・教育活動や必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフ・グッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いで興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと願っています。



地元と国立公園の宥和をめざして

ジョン・カヘークワ

2017年10月20日、ポポフは創立25周年の祝賀会をルウィロにある中央科学研究所で開催しました。この日はあいにく1日中雨でしたが、キブ州知事やカフジ・ビエガ国立公園長をはじめ多くの人々が集まってくれまし



ポポフ創立 25 周年記念式典であいさつするジョン・カヘークワ

た。私のほかに政治家、研究者、NGO,地元代表などがそれぞれ25分ずつのスピーチを行い、学生と地元の人々(バンツー系とピグミー系を含む)が伝統的なダンスを披露しました。新公園長のルシアン・ゲデオン・ロクムは、25年という長きにわたるポポフの国立公園と地元への貢献に、地元のスワヒリ語で謝辞を述べました。そして国

の保護区と地元の団体であるポポフの宥和の 証として、1本の苗木を植樹しました。

昨年ポポフが受賞した Prince William Awards 2016 の基金は苗木を育成するために使われ、この日 12万5千本の苗木が近隣の村へ配られました。苗木はそれぞれの団体や地域の代表者の手によって、1本ずつ記念として植樹され、それをイギリスから取材にやってきたBBCが撮影しました。こうしてポポフの地道な活動が地元の人々に認められ、世界に発信できたことをとてもうれしく思います。まだまだ政治的に不安定な状態が続き、ポポフの活動も十分には実施できない現状にありますが、引き続き温かいご支援をお願いいたします。

ジョン・カヘークワ

2018年2月9日に、ポポフのメンバーは地元のミティ村の住民たちとともに、カフジ・ビエガ国立公園の管理事務所を目指してデモ行進をしました。それは、大型バスを借り、垂れ幕でおおったトラックに乗り、環境学級の生徒たちも全員参加しての大行進でした。垂れ幕にはフランス語、英語、スワヒリ語の3つの言語で、「ヒガシローランドゴリラの保護を目指すコミュニティー」と書かれていました。1か月半前に着任したばかりのデ・デュ・ビャオンベ公園長と公園スタッフは驚きの目で私たちを迎えました。カフジ・ビエガ国立公園の創立以来50年間、地元民と対立を続けてきた公園側にとって、地元住民によるゴリラ保護の提案と礼賛が起こるとは夢のような出来事だったからです。



ポポフは公園の活動に 2000 リットルの燃料を支援しました

カフジ・ビエガ国立公園は 1970 年に主としてゴリラの 保護を目的として設立され、1980 年には世界自然遺産に 登録されました。しかし、それまで保護区内の自然資源に 頼ってきた地元民たちは、狩猟採集、地下資源の採掘、薪、 建材、薬用植物の採集を止めようとせず、度々公園側と衝 突を繰り返してきました。就学率が低い地元の人々にとっ て、自然保護の理念を理解するのは容易ではなく、貧困や 人口増加、民族間の争いなどの影響もあって、なかなか公 園の法律に従うことができなかったのです。1992 年に設 立されたポポフは地元民の手によるNGOで、環境教育を 実施しながら、保全活動に地元の人々を参加させ、多くの 雇用を生み出しながらゴリラの保護に対する理解を深めて きました。その結果がやっと実ったのです。

昨年10月のポポフ創立25周年では、ポポフが育てた 苗木12万5千本を近隣の村に配りました。今回は、公園



ポポフが寄付した長靴をはいて行進する公園のレンジャーたち

内で働くレンジャーたちに 100 足の長靴を配り、運搬に利用する車の燃料(軽油) 2,000 リットルを公園に寄付しました。そして、今後ポポフが代表する地元住民と公園との間で、次の活動を協力して実施していくことに合意し、協定書にサインしました。

- 1) 密猟者が仕掛けたワナを破壊、あるいは没収する。
- 2) 密猟者が使う山刀、ロープ、採掘用シャベル、ネットなど あらゆる物を取り押さえる。
- 3) 地下資源の密掘者を取り押さえる。
- 4) 保護区内での焼畑や耕作を消滅させる。
- 5) 保護区内で薬草やきのこの採集を止めさせる。
- 6) 保護区内で建材、薪、炭、などの採集を止めさせる。

これらの共同活動は3か月間にわたって実施され、その成果はレポートにしてポポフのホームページやジャーナルで発表することになりました。ビャオンベ公園長は、地元の人々がこれほど熱意をもって公園の活動に協力す



ると提言したのは、いくつもの公園長を歴任した私にとって初めてのことで大変にうれしい。ぜひ、この試みをモデルケースにして、コンゴ全国に広めたいと語りました。今後、これらの共同活動はさまざまな形で報告していこうと思います。



活動報告



(2017年6月から2018年5月まで)

▼ 2017年

6月11日	三ノ会講演「ゴリラ楽」 茂山千三郎・山極寿一 金剛能楽堂(京都市)
8月25日	くちえらぶ講演会「ゴリラと歩いたアフリカ」 山極寿一 口永良部島公民館(屋久島町)
9月10日	Save the great apes 講演会「アフリカでゴリラと考えた人間の由来と自然保護」 山極寿一
	サカスギャラリー(東京)
10月26日	けいはんな学研都市 30 周年記念講演「AI にできない人間の幸せ ーゴリラから見たコミュニケー
	ションの進化と人間社会の未来」 山極寿一 けいはんなプラザ (精華町)
11月4-5日	第 20 回 SAGA シンポジウム ポポフブース出店 日本モンキーセンター (犬山市)

11月17日	花王芸術・科学財団シンポジウム	家族の由来と未来	-ゴリラから A	まで」	山極寿一
	SMBCホール (東京)				

11月19日	アフリカ文化探検 50 周年記念シンポジウム「ゴリラから見たアフリカの50年」	山極寿一
	经成时团到今始(方郑市)	

11月21日	1 んらん な海館 小開講演会	「野生の思考と未来の人材育成」	山杨丰一	1 4 6 4 衣法館	(古郏市)
11月41日	しんりん文川昭ム川明伊云	「封工の心ちと不不の八的目別」	山型村	しんりん文派時	(小印1)

11月27日	日本に健全な森を作り直す委員会講演「ゴリラはヒトに何を教えるのか」	山極寿一
--------	-----------------------------------	------

吉賀町公民館(吉賀町)

国立科学博物館(東京)

12月5日 四国学院大学人権週間講演会「野生の思考と未来の人材育成」 山極寿一 四国学院大学(善通寺市)

▼ 2018年	
1月16日	飼育の集い「野生の窓としての動物園」 山極寿一 平安の森京都(京都市)
1月24日	公開対談「地球永住計画」―この星に生き続けるための物語 関野吉晴・山極寿一
	武蔵野美術大学三鷹ルーム(三鷹市)
1月28日	子どもとメディアフォーラム基調講演「ゴリラ研究者が見たスマホ社会」 山極寿一
	なみきホール (福岡市)
2月10日	全国エコツーリズム大会 in 屋久島「くちえらぶエコツーリズム」 山極寿一
	屋久島町公民館(屋久島町)
2月15日	朝日新聞ダイアログ「2030年のコミュニティーとは」 山極寿一 朝日新聞社東京本社(東京)
2月18日	かわうそ・ゴリラほろ酔い談義 あべ弘士・山極寿一 堺町画廊(京都市)
2月26日	法然院森の夜の教室「ゴリラから見た超スマート社会」 山極寿一 法然院(京都市)
4月15日	野生動物学のススメ講演「ポポフの活動とカフジからのたより」 戸田恵美 京都市動物園(京都市
4月15日	国立科学博物館フォーラム「ゴリラから見たヒト、イヌから見たヒト」 山極寿一・林良博

催しのご案内



▼ 2018年

- ●物語シンポジウム(物語の進化、歴史、創造、漫画化の実態を山極寿一、藤原辰史、いしいしんじ、竹宮恵子が語る) 2018年9月16日 上七軒歌舞練場(京都市)
- ●第21回サガシンポジウム(アフリカ・アジアに生きる大型類人猿を支援する集い) 2018年11月17日・18日 東海大学熊本キャンパス、熊本市動植物園 (熊本市)

会計報告



収 入		支 出	
昨年度よりの繰越金	3,645,978	ニュースレター印刷費	39,960
講演会・シンポジウム カンパ	15,715	ニュースレター・ホームページ作成費	26,686
作品売上寄付	166,040	ポポフグッズ材料費・制作費	57,954
ポポフグッズ売上 (現金)	98,600	郵送費	53,169
寄付(現金)	49,975	ポポフへ送金	1,900,000
売上・寄付(郵便振替)	297,000	为左车。经营会	2 170 052
受取利子	14	次年度へ繰越金	2,179.053
計	4,256,822	計	4,256,822

ろうきん東海 NPO 団体等寄付システム、日本グレイトエイプス保護基金、 エネオスクリック募金から寄付金をいただいています。

近刊案内



■ 山極寿一著 『ゴリラからの警告-人間社会、ここがおかしい』

■ 山極寿一・関野吉晴著 『人間は何を失いつつあるのか』

■ 山極寿一・鎌田浩毅著 『ゴリラと学ぶ』

■ 尾本恵一・山極寿一著 『日本の人類学』

■ チャールズ・フォスター著、西田未緒子訳 『動物になって生きてみた』

■ 西原智昭著 『コンゴ共和国―マルミミゾウとホタルの行き交う森から』

▲ 松村圭一郎著 『うしろめたさの人類学』

■ 田中二郎著 『アフリカ文化探検―半世紀の歴史から未来へ』

➡ 赤坂憲雄著 『性食考』

■ 角幡唯介著 『極夜考』

■ 新井紀子著 『A I vs. 教科書が読めない子どもたち』

■ 福岡伸一・池田善昭著『福岡伸一、西田哲学を読む一生命をめぐる思索の旅』

■ 貴船庄二著『島に棲む―口永良部島、火の島、水の島』

■ 石黒浩著 『僕がロボットをつくる理由』

■ 永田和弘著 『知の体力』

■ 前田亜紀著 『関野吉晴ゼミ「カレーライスを一から作る」』

➡ 藤原辰史著 『戦争と農業』

➡ 藤原辰史著 『トラクターの世界史―人類の歴史を変えた「鉄の馬」たち』

➡ 天野礼子著 『川を歩いて、森へ』

■ 鎌田東二・南直哉著 『死と生―恐山至高対談』

■ 田中和子編・佐藤兼永撮影 『探検家へディンと京都大学』

■ 水野一晴著 『世界がわかる地理学入門―気候・地形・動植物と人間生活』

■ 佐藤哲・菊地直樹編 『地域環境学―トランスディシプリナリー・サイエンスの挑戦』

■ 所源 亮・チャンドラ・ウィックラマシンゲ著 『宇宙経済学 (E=M) 入門―現在と未来を貫く「いのちの原理」』 地湧社

毎日新聞出版 東海教育研究所 ミネルヴァ書房

ちくま新書 河出書房新社

現代書館 ミシマ社

京都大学学術出版会

岩波書店 文芸春秋

東洋経済新報社

明石書店 南方新社 世界思想社 新潮新書

> ポプラ社 インターナショナル新書

中公新書

中央公論新社 東京堂出版

京都大学学術出版会 ちくま新書

東京大学出版会

山極寿一

このたび、ワシントン条約 CITES (Convention on International Trade in Endangered Species of Wild Fauna and Flora: 絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約)は、類人猿の生息数に関する最新の調査結果を報告しました。その結果、ニシローランドゴリラはコンゴ共和国(推定 $16 \, \mathrm{F} \, 5 \, \mathrm{F}$ 頭)を中心にして $20 \, \mathrm{F}$ 頭以上の生息が見込まれましたが、これは $4 \, \mathrm{H}$ 亜種の内で最も広い範囲に分布しているためです。分布域全体を見ると生息地が細かく分断され、それぞれが孤立しているために、個体数が急速に失われる恐れがあります。この $30 \, \mathrm{F}$ 間に全生息数の 80%近くが失われた可能性があると推測されています。

ポポフが保護活動をしているヒガシローランドゴリラは、たった3,800頭しか生き残っていないことが指摘されました。1990年代の初めには1万7千頭を超えるゴリラの生息が推定されていたのに、30年たたないうちに5分の1近くに減ってしまったのです。複数の調査でいずれも80%を超える減少が報告されています。これは、1994年に隣国ルワンダで起こった内戦が飛び火してコンゴ民主共和国が戦争状態に陥り、人々が保護区内を逃げ回り、兵隊が踏みしだいていった結果、多くのゴリラが犠牲になったからです。ヒガシローランゴリラの生息域のうち、たった26%が保護区になっているにすぎず、その保護区でさえポポフの活動している地域を除き、密猟や伐採、不法な地下資源の採掘で森は荒れ放題といった状態です。政府のコントロールが効かず、4つの亜種のなかでヒガシローランドゴリラが最も減少率が高く、将来が危惧されています。

クロスリバーゴリラは、今回初めて正確な生息数が算出 されました。れまで確かな推定値がないので増減の程度は 不明ですが、おそらく減っていることは間違いないと考え られています。もともと生息数が少ないので、絶滅の危機 に瀕していることは疑いようがありません。

唯一増えているのはマウンテンゴリラです。CITES の推定では、ヴィルンガ地域とブウィンディ地域の2か所に分かれて合計880頭ですが、最近のWWF(世界自然保護基金)の報告では約1,000頭になっています。これは、ヴィルンガ地域のゴリラが2010年から120頭増えて604頭になったとしているためです。しかし、私が1980年に調査をした時、ヴィルンガ地域には240頭でした。それが2倍以上に増えたとしても、すでに小さな遺伝子プールであることに変わりはありません。遺伝子の多様性はかなり低いと思われ、今後もそれほど強い繁殖力は望めないでしょう。

個体数の差こそあれ、今回 CITES は 4 亜種のゴリラすべてを Critically Endangered という最高ランクの絶滅危機に位置付けました。ポポフもゴリラたちとの共存を目指してあらゆる努力をしていこうと思っています。

ゴリラの種類	生息数	増減	増減の程度
ニシローランド	200,000-250,000	7	>-80%
ヒガシローランド	3,800	7	-77-93%
マウンテン	880	7	+26%
クロスリバー	215-309	7	不明

トルの地域に設置することが可能になりました。地域を1 キロメートル四方のグリッドに区切ってカメラトラップを 仕掛け、グリッドに沿って4キロメートルのトランゼクト を10本切り、植生をモニターする計画です。公園から12 人のレンジャー、私の勤める中央科学研究所から4人の若 い研究者が参加し、カメラトラップの使い方について研修 を実施しました。この新しい技術を使って、動物の種類や 行動について画像や映像を用いて調べることができます。

昨年の11月に16台のカメラを設置し、8本のトラン

ゼクトを切って調査を始めました。カメラは月に一度回収して撮影された画像や映像を調べます。すでに、12月から5か月分の資料を入手して現在分析中です。驚いたことに、めったに姿を見せなくなっていたフクロウグエノンがカメラに映りました。赤ん坊を背中に乗せたチンパンジーは興味深そうにカメラをのぞき込んできました。これからたくさんの画像や映像が撮れ、面白い行動が見られるだろうと大いに期待しているところです。



AA

カメラトラップに写ったフクロウグエノン

カメラトラップを設置しました

オーグスティン・カニュニ・バサボセ

カフジ・ビエガ国立公園には、ゴリラのほかにチンパンジーや、この地域にしか見られないフクロウグエノンなどの10種類の霊長類、モリオオイノシシやブッシュバックなどの動物が暮らしています。しかし、1990年代の難民

流入や戦争によってどの程度犠牲になったのか、現在どん な動物がどれだけ生き残っているのかについて調査は実施 されていません。まだ保護区内は安全ではなく、しかも調 査を実施する資金も人材も不足しているからです。

うれしいことに、このたび日本モンキーセンターの支援で、20台のカメラトラップを公園内20平方キロメー





カメラトラップに写った子連れのチンパンジー

カフジにおけるゴリラの近況

山極寿一

今回、公園当局がモニターしているゴリラの集団をポポ フの協力のもとに詳しく調査をしました。その結果、これ までの集団の構成が大きく変化していることが分かりまし た。ここ数年詳しい調査ができず、あまり人になれていな い集団はベッドの数と糞の大きさでメンバー構成を推定し ていたこともあったので、今回の結果がより正確な構成だ と思われます。うれしいことに、モニターしている集団 の数は13群154頭になりました。昨年の報告では9群 118 頭だったので、ずいぶん増えたことになります。し かも、1996年の258頭から2000年に130頭まで減っ たとされた高地のゴリラの数が、337頭にまで増えたと 推定されました。21世紀は高地のゴリラにベビーブーム が見られ、チマヌーカ集団でも立て続けに4組の双子が 生まれました。こうした子供の大量出産が生息数の増加に 貢献したことは確かでしょう。しかし、18年間で2倍以 上に増えるとはちょっと考えられないので、おそらく密猟 が盛んな低地のゴリラが高地へと移動してきたと考えられ ます。ここ数年、ポポフは低地のゴリラの保護に取り組ん でいますが、高地ではとにかくポポフの活動成果が実った と考えてよいでしょう。とてもうれしい知らせです。

ポポフが知っている集団でも、最近かなり大きな変化が ありました。まずチマヌーカ集団では、成長してシルバー バックになったボナネが3頭のメスとその子供たちを引 き連れて集団を出て、6頭の新しい集団を作りました。チマヌーカはその前後に多くのメスを失い、14頭いた大人のメスは2頭に減ってしまいました。しかし、大きくなった息子たちと、もう乳離れした子供たちは母親が去ってもチマヌーカの元を離れず、19頭の比較的大型の集団を形成しています。チマヌーカも今年33歳になりましたから、野生のゴリラではもう老年期に入ったと言えます。そろそろ老後の生活を始めたのかもしれません。

ムプングェ集団は最近人付けされ、まだメンバー構成がよくわかっていませんでした。昨年まではムプングェと名付けられたシルバーバックのほかに6頭のメスがいて、子どもはいないと考えられていましたが、メスは9頭、赤ちゃん6頭を含む子供が10頭もいることが判明しました。外からメスが子供を連れて大量にやってきたのかもしれません。ナマディリー1と2は、一つの集団が分裂してできたと考えられ、これまでビリンドゥワと呼ばれていた集団がナマディリー2と合体した可能性があります。しかし、両集団ともゴリラがあまり人に馴れていないので、詳しいことはわかりません。チブルーラ集団は新しくモニターの対象になった集団で、私が1978年に調査を始めたときに活躍していたトラッカーの名前が付けられました。

ガニャムルメ集団は昨年から5頭減り、しかも赤ん坊が全くいなくなっているのが気がかりです。赤ん坊はベッド調査では存在をなかなか確認できませんので、ひょっとしたら数え落としているのかもしれません。マンコト集団

とランガ集団では、メスと子供の数はだいたい以前の通りですが、これまで数えられていなかったブラックバック(若いオス)が複数登場しています。若いオスは集団から少し離れていることが多く、ベッドも離れて作るので見落としてしまうことがあります。今回、その存在が確認されたのだと思いますが、若いオスはやがて集団を離れていくので固定メンバーとは言えません。

数年前にシルバーバックを亡くしたムファンザーラ集団は2つに分裂し、それぞれの集団で順調に子どもが生まれて育っていることが判明しました。子供連れのメスの出入りがあったかもしれませんが、この構成ならば両集団ともに安定して繁殖をしていると言っていいでしょう。

残念ながら、ずっと一人暮らしを しているムガルカのもとには、まだ メスたちが来てくれないようです。 やはり、片腕というハンディキャッ プを背負っていることが原因かもし れません。両手で交互に胸を叩くド ラミングという、シルバーバックに特有なディスプレイを 満足に行うことができないからです。でも、彼は観光客の 人気者で、この頃では地元の人々にもよく知られるように なりました。

これからも、ポポフはゴリラの動向をモニターして、その様子を皆さんにお知らせしていこうと思います。楽しみにしていてください。



分裂前のチマヌーカ集団の休息風景

集団名	シルバーバック	ブラックバック	オトナメス	ワカモノ	コドモ	アカンボウ	合 計
	13 歳以上	8-12歳	8 歳以上	6-8歳	3-6 歳	0-3 歳	
チマヌーカ	1	5	2	2	4	5	19
ボナネ	1	0	3	0	1	1	6
ムプングェ	1	0	9	0	4	6	20
ムガルカ	1	0	0	0	0	0	1
ナマディリーニ 1	1	3	6	0	6	4	20
ナマディリーニ 2	1	0	7	0	7	0	15
チブルーラ	1	0	6	3	0	1	6
ガニャムルメ	1	0	6	0	3	0	10
マンコト	1	2	10	1	3	2	13
ランガ	1	5	3	0	2	1	12
ムファンザーラ 1	1	3	3	2	1	4	14
ムファンザーラ 2	1	0	4	0	4	3	12
無名	1	2	1	0	2	0	6
合 計	13	20	51	8	33	22	154



阿部知暁 画

ポポフ・グッズ



(おまかせ10枚組) 1000円



☆ビチブ・ムフンブーカ 絵はがきセット

(おまかせ5枚組) 600円

☆ケイタイ・ストラップ(黒)

2000円

... . . .

☆ポポフエコバッグ

(薄手) **1500**円 / (厚手) **2500**円 【ア】~【カ】の図柄をご指定ください

*エコバッグの生地は厚手と薄手があります 注文時にどちらかを明記してください

*薄手バッグは【ア】、【イ】、【オ】のみです

*薄手は注文から納品までひと月ほどかかります



他にも図柄が選べるバラ売りの絵はがきやここに掲載できなかった グッズも用意しています。

「ポポフホームページ」のグッズページも是非ご覧ください。

ポポフグッズのページ

http://popof-japan.com/blog/?page_id=24





ポポフ日本支部では、ポポフのメンバーが作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は郵便局で「**青色**」の振り込み用紙にご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。 折り返し、グッズをお送りいたします。

口座番号:00810-1-90217

加入者名:ポレポレ基金

郵便振替情報 OR コード►



お願い:ポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。

連絡先:〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室 ポポフ日本支部



ポポフ日本支部の公式ウェブサイトには、ポポフの活動、ゴリラ、カフジ・ビエガ国立公園を紹介するページや、グッズの販売、ポポフニュースのバックナンバー閲覧ができるページがあります。また、ポポフニュースに連載されているコンゴの昔話は挿絵が原画のカラーになっています。

ポポフの活動をより広く世界の人々に知ってもらうために、英語版のウェブサイトがあります。ポポフのこれまでの歩みや現在の活動の様子、スタッフ、カフジ・ビエガ国立公園、ゴリラなどについて情報を発信していきます。また、このウェブサイトと並行してブログも開設しました。こちらではポポフの活動だけでなく、国立公園周辺の村や町に住む人々の息遣いが聞こえてくるような、日常的な出来事を記事にして載せています。海外のお知り合いなどにご紹介いただければ幸いです

河辺智弘 (ポポフ英語版ホームページ担当)



ポポフのホームページ(日本語)

日本語サイト: http://popof-japan.com/blog/



ポポフの英語版ウェブサイト

英語サイト: http://www.polepolefoundation.org/

英語ブログ: http://www.blog.polepolefoundation.org/



10

コンゴ民主共和国キヴ地方の昔話

ウサギとヒョウ

むかしむかし、ウサギとヒョウが大きな森の中で暮らしていました。ある時ヒョウがウサギに「友達になろうじゃないか」といいました。ウサギも「いいね」と言いました。それから、ウサギとヒョウはどこへ行くのもいつも一緒でした。

ある日、ヒョウはウサギに豆を買ってきてくれと頼みました。ウサギは買い物にでかけて行き、豆を買って帰ってきました。そうして、豆料理ができあがるころに、ヒョウはまたウサギに買い物をたのみました。それは、ムカムシという鍋から食べ物をすくうしゃもじでした。ウサギは思いました。ごちそうがもう出来上がるというのに、また遠くまで買い物に行け

というのは、ヒョウはごちそうを独りじめしようと思っているのに違いない。

ウサギは知恵を巡らせながら、道を行きました。森の中ほどまで来ると、ウサギは森の葉っぱをとって、葉っぱで体中を覆いました。ヒョウを脅かせてやろうと思ったのです。ウサギが葉っぱで体を覆うと、全くもって恐ろしい動物になりました。

家に戻ると、ウサギはヒョウに恐ろしい姿でいいました。 「お前の手を鍋に入れてみろ。手で豆をすくって私のところへ 持って来い」

ヒョウは恐ろしい怪物がやって来たと思い、ガタガタ震えました。ヒョウは手を熱い鍋の中に入れて、豆をすくって差し出しました。怪物はうまそうに豆を食べましたが、ヒョウはひどい火傷を負いました。怪物は豆を食べ終えると、また注文を出しました。

「急いで湯を沸かして、ウガリをこねてくれ」 ヒョウは困りました。「どうしたものか。ウガリをこねるムイ コを持っていないのに」



すると怪物は「お前の手でこねろ」と言いました。ヒョウは手でウガリをこねました。熱い湯に粉を入れてこねたので、またひどい

語り手:マラシ

挿し絵・訳:ふしはら のじこ

怪物はウガリをうまそうに食べ、 食べ終えると帰って行きました。

火傷をしてしまいました。

長い時間がたってから、ウサ ギは仮装の葉っぱを取り、家に 帰って来ました。

「ねえ君、頼まれたムカムシを見つけることができなかったよ」

「いやいや、もういいんだ。君が出かけてから大変な目にあってね。恐ろしいものがやって来て、鍋から豆を出すのも、ウガリをこねるのも手でやらされたもんだから、こんなにひどい火傷をしてしまったよ」

ウサギはヒョウをなぐさめていいました。 「大丈夫、すぐ治るさ。今まで通りにやりましょう」

ある日、ウサギとヒョウは森へ出かけました。森の中で、ヒョウがウサギにいいました。

「おまえさんはいつもいつも、私の仕事を頼まれて、好きなところへ使いに出されても、嫌がりもせずにやっているのは、私が怖いんだろう?」

ウサギは答えていいました。

「ええ、私はあなたに従っているし、怖がっていますよ。でも あんたは、とんでもない愚か者だね。だって、あんたにウガリ を手でこねさせたのも、豆を手でよそわせたのも、それであん たが火傷をしたのさえも、私の仕業だよ。ほんとに大ばか者だね」

ヒョウはそれを聞くと、たいそう怒って、友達を引き裂いて やろうとしました。けれど、ウサギはとっても素早く逃げて、 一つの穴の中に飛び込んで隠れてしまいました。

友だちは、もうそっれっきり。会うこともありませんでした。これでお話おしまい。

